

B-2 パークロールエチレン浴からの分散染料型蛍光増白染料による蛍光増白
お茶女大家政 小口哲子・林雅子・矢部章彦 新潟女短大 ○駒城素子

目的 前報に引きつづき、パークロールエチレン染浴からの蛍光増白につき、二、三の分散型染料—ポリエステル布系の増白効果におよぼす諸要因を水分散系と比較検討した。また、これらの結果を直接型染料—レーヨン布の系と比較考察した。

方法 試料：蛍光増白染料は日本化薬 K.K. によるナフタルイミド系 (KLT-A) およびベンツオキサゾール系 (KLT-O) 分散染料型蛍光増白染料を使用した。繊維布はポリエステルモスリン布を精練、乾燥して使用した。パークロールエチレン、分散剤 (Aerosol OT) は前回と同じものを用いた。装置および方法：染色装置は反転式高温染色機 "Tumblet" を、溶液の分光吸収・試料布の分光反射率の測定は日立分光光度計 EPU-2A 型および付属のキセノン光源による反射率測定装置を使用した。溶剤中の微量水分測定は三菱化成式カールフィッシャー電気滴定装置 MS-2 型によった。

結果と考察 ①使用した KLT-O, KLT-A のいずれも 103 ~ 135°C の温度範囲でかなりの蛍光増白効果があらわれた。②染浴中の微量水分、分散剤の増白効果への影響はほとんど見られない。③水分散染浴からの増白効果と比較すると、はるかにおよばない。これは染料の分配が、水分散染浴においてはポリエステル繊維側に高いのに対して、パークロールエチレン染浴では染浴側に高く繊維側に低くなるためと考えられる。これらの結果から、ポリエステル—分散染料型蛍光増白染料の溶剤染色系では繊維—染浴間の染料の分配を繊維側に高くするための染料・溶剤・染色条件の選択についてさらに検討する必要があると言える。